

安全性と快適性が共存する 公共空間のデザイン手法

～空間づくりと仕組みづくりの両立を目指して～



平賀 達也
HIRAGA Tatsuya

株式会社ランドスケープ・プラス／代表取締役
一般社団法人ランドスケープアーキテクト連盟 (JLAU)／会長

公共空間の整備では、空間づくりだけでなく、継続的な活動を支える仕組みづくりも重要となる。安全性と快適性が共存する空間づくりの他に、地域の事業者や地元の関係者が自分事として関わる持続的な仕組みづくりを可能にした二つの事例について解説いただく。

はじめに

私たちの身近にある公園や広場、あるいはまちなかの歩道や河川など、日常生活の中で何気なく使っている公共空間の多くは高度経済成長期に整備されたものだ。21世紀に入り、日本が少子高齢化を迎え成熟期に移行する中、これらの公共空間が地域社会の抱える様々な課題解決に貢献しているとは言い難い状況にある。公園や道路などを管轄する国土交通省も、2017年の都市公園法の改正や、2020年の道路法を改正する法律案の閣議決定を受け、官民の連携や地元の参加によって公共空間を積極的に活用できるまちづくりの推進に取り組み始めている。本稿では、これらの新たな制度が人口減少社会の税収減を補う施策ではなく、成熟社会において誰

もが気軽にまちの課題解決に参加できる基盤になり得ることを、私が携わってきた公園再生事業や地方創生事業の取り組みを通じて紹介したい。

南池袋公園（東京都豊島区）の取り組み

2016年にリニューアルオープンした南池袋公園は、2017年に施行されたPark-PFIのひな形として取り上げられる機会が多い。しかしながら、本公園が目指したのは、民間資本の活用や手離れのよい運営ではなく、公園という公共資産の持続的な運営に地域の事業者や地元の関係者が自分事として関わる仕組みづくりにある。

戦後の区画整理事業によって空襲で焼失したお寺を集め、駅に近い土地が余って公園になったのが



写真1 南池袋公園



写真2 南池袋公園周辺の様子

現在の南池袋公園である。闇市が商店街になり、公園を挟んで週末は法要を行いたいお寺と、公園でイベントを催したい商店街の意見は対立し、両者は長らく犬猿の仲であった。確執の原因である公園は徐々に寂れ、バブル崩壊後には公園全体をホームレスが占拠するようになった。焼き出し支援の聖地と化した状況を打開せよと地元住民が豊島区に迫る中、東京電力が公園の地下に変電所をつくりたいとの申し出に区は飛びつくことになる。しかしながら、新たな公園整備のプランを持って地元説明会を開催しても意見がまとまるはずもなく、完成後にまた元の状態に戻るのではないかという地元住民の懸念を拭うことができないまま長らく硬直状態が続いていた。

そのような中、私たちランドスケープ・プラスは2009年より新庁舎の設計に携わる中で、庁舎の完成後を見据えた池袋副都心のマスタープランづくりや、公園整備の方針づくりにも関わることになる。公園整備を進めるためには、地域独自の仕組みづくりが不可欠であるとの考えから、地元住民が公園使用の意思決定に関われる組織「南池袋公園をよくする会（よくする会）」の設立を区の関係者に訴えた。なぜならば、慈善団体の公園使用に対し、行政はNOと言えないが、地元住民の総意としてNOと伝えることはできるからだ。この提案に対し区の動きも早く、居住人口の少ない近くの公園を焼き出し支援の場所として提供することを決定し、公園整備は新たな局面へと動き出す。

まず「よくする会」の運営資金を確保するため、公園内にカフェレストランを導入し、売上の一部を地域貢献費としてよくする会が使える仕組みを考案。そして「地域精通度」や「地域貢献度」に軸足を置いたカフェレストラン事業者のプロポーザルを実施し、地元の人気店が選定された。開園の1年前から「よくする会準備会」をスタートし、公園の運営ルールについて粘り強く何度も議論を重ねた結果、「よくする会」は、行政頼りの受動的で閉鎖的な公園管理を脱却し、地元主体の能動的で開放的な公園の運営を支援する組織を目指すことになった。

地下変電所の工事により、更地の状態から公園の空間づくりがスタートした。残念だったのは、良質な表土が全て撤去され、山砂で埋め戻されていたことだ。しかし、高密都市池袋にあって空が残る空間

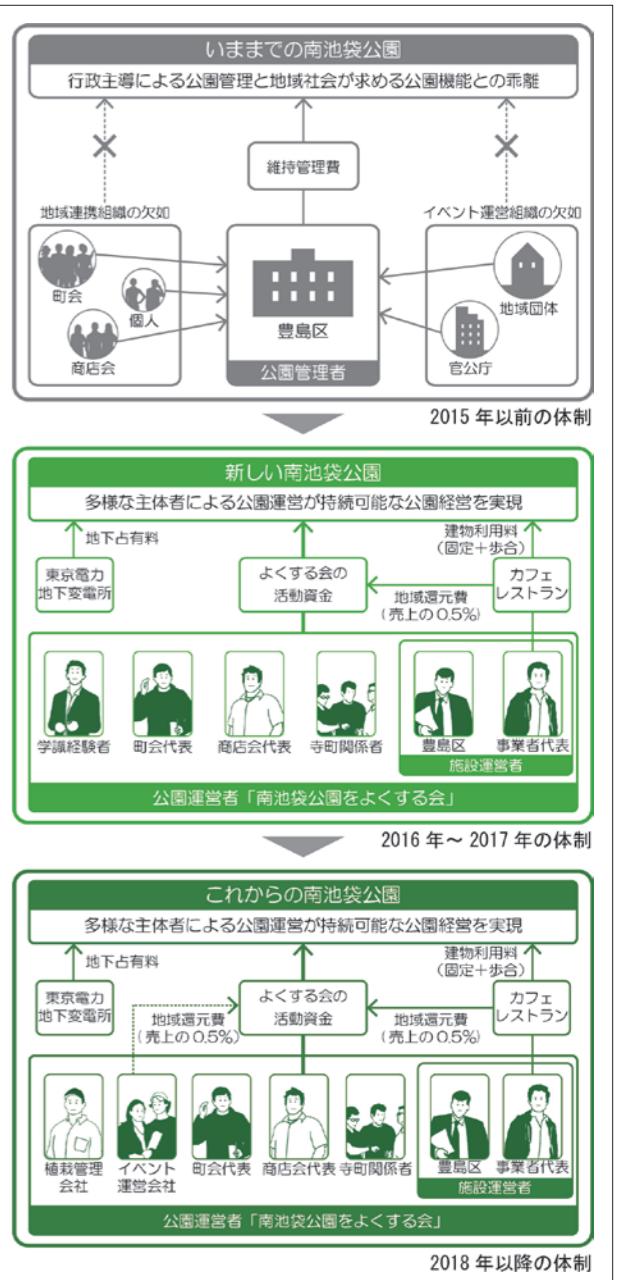


図1 南池袋公園の体制

はとても貴重に思えた。脆弱な植栽基盤と良好な日照条件。公園の中心を芝生広場にしたのはそのような理由からだ。設計にあたり、周囲のビルがコンクリートの外壁面であったことから、園内の工作物は強固で安価な土木用PC材を採用した。そして、既存樹木を活用して公園外周を緑で包み込み、周囲の環境と公園を同化させ境界を曖昧にすることで、誰もが気軽に立ち寄れる居心地のよい場所をつくりたいと考えた。カフェレストランは、メゾネット型ワンルームの内部空間から芝生の景観を最大限享受できる天井勾配にこだわった。階段状のサクラテラ



写真3 既存樹を残すためにU字側溝PC材を擁壁に活用



写真4 グラフィックコンクリートで雑木林の風景を継承

スは、多くの人が芝生を眺めながら過ごせる場所とした。結果として、芝生の養生の中もストレスなく過ごすこと、特に一人で来園する方に人気なのが嬉しい。

長い時間をかけて、行政・民間・地元の関係者が共に悩みながら走り続けてきた結果が、芝生の上で楽しそうに過ごす人々の日常を支えている。公園が都市空間の価値を高め、地域社会の基盤となっていく。消滅可能性都市に指定された豊島区が生まれ変わるきっかけとなったことが、南池袋公園がもたらした何よりの成果であろう。豊島区では、池袋駅周辺にある4つの公園が持つそれぞれの特徴を活かしながら、歩いて楽しめる回遊性のあるまちづくりを進めている。この政策の根幹を成すのが「南池袋公園をよくする会」の活動であり、南池袋公園の存在が人と自然のつながりによる安全で快適な都市空間の形成を目指す大きなうねりを池袋全体に引き起こしている。

馬場川通り（群馬県前橋市）の取り組み

2024年に完成した馬場川通りプロジェクトは、衰退する中心市街地を活性化すべく、地域の象徴となる通りを地元有志の寄付金によって公共工事を行う地方創生事業であった。都市再生推進法人として前橋市より指定されたエリアマネジメント団体である前橋デザインコミッショ（MDC）が行政に代わり事業の推進とマネジメントを担う中、私の事務所はプロジェクト全体のデザイン統括者として、基本計画から工事監理、そして完成後の管理運営に至る空間づくりと仕組みづくりの構築に携わってきた。

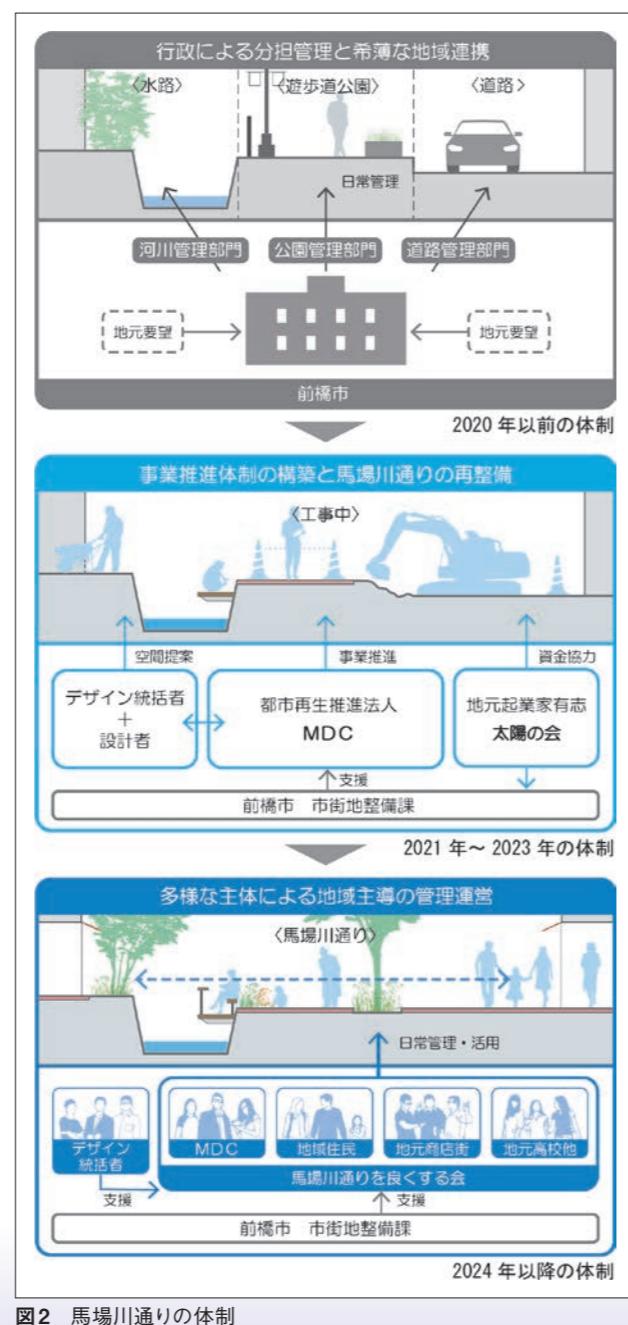


写真5 馬場川通り

デザイン統括者に求められた使命は、気候変動や社会変容といったグローバルな課題を前橋ならではのローカルな発想で解決することであった。着目したのは前橋発展の礎となった水路の存在である。

江戸期より城内と城下をつないでいた馬場川通りには、いみじくも利根川から取水された水路の一部が残っていた。私たちのデザイン提案はシンプルで、水路の柵を外して蓋を取り払い、デッキやベンチを設けて人と水との関係性をまちなかに取り戻すというものであった。民間の資金提供者からは満場一致で承認を得るが、行政の管理者からは安全面に問題ありとの指摘を受けて協議が難航。この局面を開拓するため、市街地整備課が馬場川通り全体の管理窓口になることを決意。その後、市街地整備課とMDCがタッグを組み周辺地権者が都市利便増進協定を結ぶことで、官民が連携して公共空間の管理運営を担える仕組み「馬場川通りを良くする会」を構築。この英断により、酷暑で有名な前橋にあって灌漑用水としての役割を終えた水路をまちの冷却装置と捉え直し、ウォーカブルな社会に資する安全性と快適性を兼ね備えた環境基盤を実現している。役割を終えた水路を、グリーンインフラやウォーカブルな公共資本に再編した馬場川通りの取り組みは、城址を抱える地方都市の復興にも必ずや希望を与えるに違いない。

これからのまちづくりは、国際社会における経済動向に左右されないよう、

地域に残る歴史や文化を守ることに軸足を据えて、ローカルに特化した空間や仕組みを発明していくことが重要な活動目標となろう。前例なき課題解決に挑戦するには、グローバルな視野を持ってローカルな価値を見出していく必要がある。前橋をこよなく愛する地元の有志たちから学んだ、これからの時代を生き抜くためのデザイン手法である。

おわりに

私が生業とするランドスケープアーキテクチャーとは、土地そのものを国土や流域といった大きな空間で捉え、土地の行く末を地球史や地誌学といった長い時間で考える視点を持ち合わせている。まちなかの水路や鎮守の社などに未だ分断されていない空間や時間のつながりを感じるのは、人間が自然との営みの中で大切に守りつなげてきた地域独自の文化を見出しているからだ。このような志向は、その土地が潜在的に持つ自然の力を信じていないと生まれてこないし、人間の引いた境界を消し去りたいと願う感情の発露が、公共空間のデザインに大きな力を与えてくれる。そのようにして獲得された公共空間には、目を凝らせば境界を消そうと試みた意志ある人たちの痕跡を見て取ることができる。まちの中にそのような公共空間が生れてくれれば、世界はもっと住みやすい場所になるのではないだろうか。誰もが自分の場所だと思える土地から、次代を担う新たな空間や仕組みが生まれてくるであろう。そのようなメッセージを込めて本稿の文末を締めくくりたい。

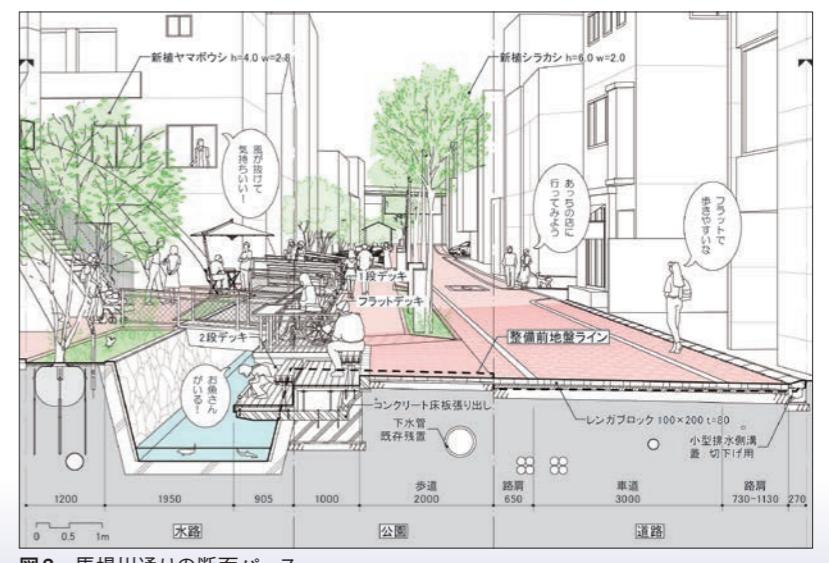


図3 馬場川通りの断面パース